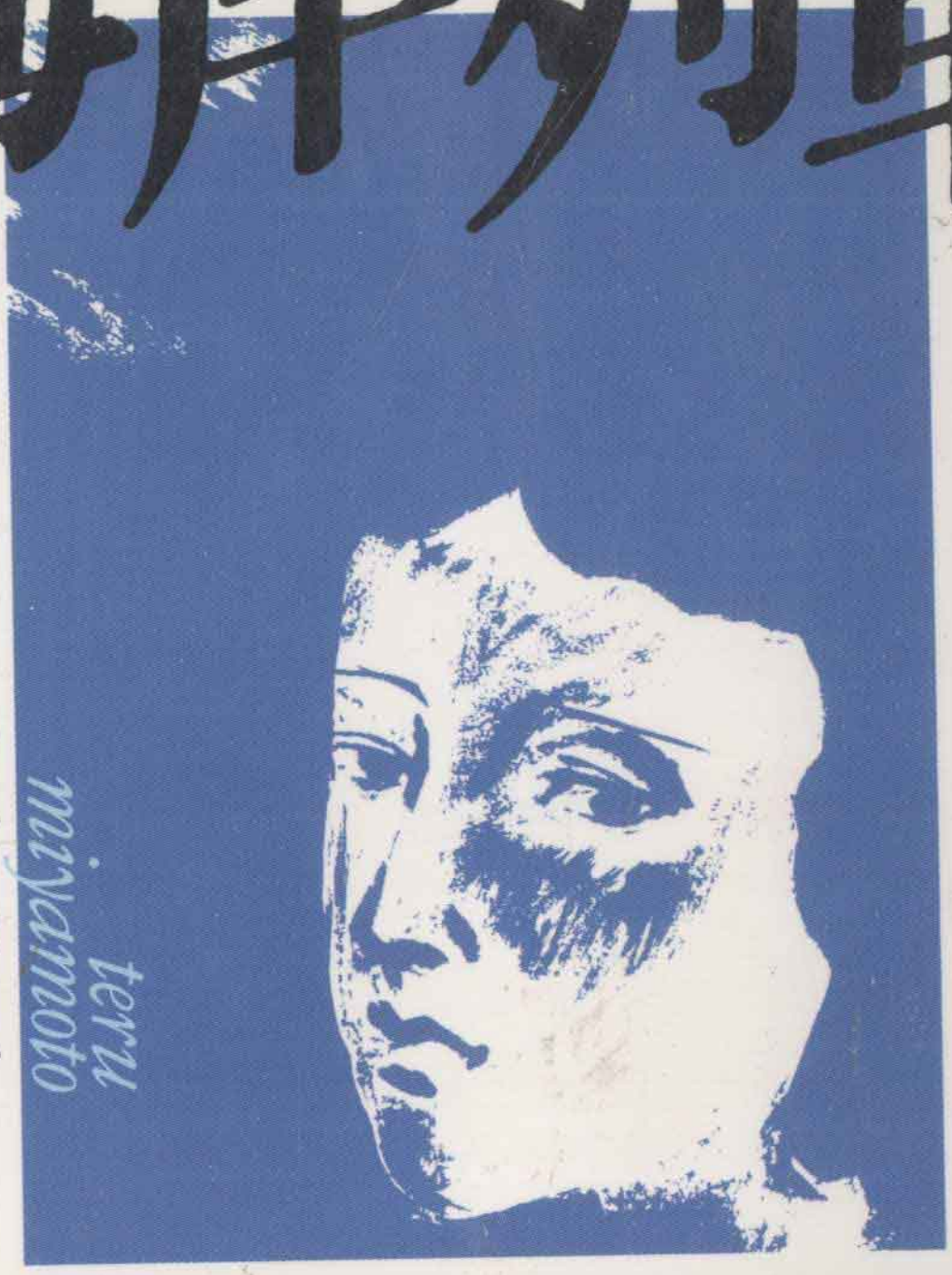
海岸列車

下

宮本輝



文春文庫

文春文庫

海岸列車（下）

定価はカバーに
表示してあります

1992年10月10日　第1刷
1993年6月10日　第3刷

著者　宮本　輝

発行者　堤　堯

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-734808-X

文春文庫

海岸列車

(下)

宮本　輝

文藝春秋

目次

第七章　夏の海　7
第八章　夜の入江　103
第九章　花壇　186
第十章　砂の海　276
あとがき　393
解説　栗坪良樹　396

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

海岸列車　下

第七章　夏の海

いつもよりも、首都高速を走る車の音がうるさく感じられて、まるで湯気の中でうごめいているようなビルや高速道路や車の群れを、かおりは事務所の窓から何度も眺め入った。そのたびに、眩しくて目が痛くなり、執務机に戻ると、スケジュール表に目を通したり、稟議書や報告書の文字を追ったりした。中国の旅から帰って二カ月半がたっている。

かおりは、西安や南京や上海の風景を思い出すたびに、そこに戸倉陸離がいなかったことを寂しく感じた。そして、戸倉が北京に着いた日の、王府井大街で彼と出くわした瞬間の、どこか屈折した落ち着きのなさも、また強い寂しさとして思い出すのだった。

あのとき、かおりは、ああ、自分は十九歳のときに犯した愚かなことを再び繰り返そうとしていると思い、戸倉との、待ち望んでいた北京での逢瀬に酔えなくなった。それ

どころか、まだ酔ってもいないのに、二日酔いの不快さの中に放り込まれたような気持になった。

だから、戸倉が、成り行きにあらがう形で、かおりとの関係に一線を引いたとき、失望とかすかな屈辱よりも、ほっとする思いのほうが強かったのである。けれども、戸倉と北京で別れ、西安へ行き西安から北京へ戻り、南京へと移り、そこから列車で上海へと旅をつづけるうちに、失望とかすかな屈辱が心のすべてを占めたり、ああ、これでよかったのだとほっとしたりする度合は濃度を深めて、絶えずどちらかにかたよった。

かおりは、戸倉を憎んだり、感謝したりしながら、そのふたつの大きな振幅の中で旅を終えたのだった。

しかし、日本に帰ってからも、絶えずかおりの神経は電話に向いた。もうこれっきり、戸倉から深夜の電話はかかってこないに違いないと思った。日本に帰って三日がたち十日がすぎても、戸倉からの電話はなかったので、なんだか戸倉とのすべてのつながりが切れたような気がした。

けれども、二日前の夜中に、以前とまったく変わりのない喋り方の、戸倉からの電話を受けた。戸倉は、かおりに、西安の印象を訊き、南京や上海での様子を訊いた。かおりは、劉慈声の、影法師みたいな補佐の仕方が、いかに仕事の打ち合わせに役立ったかを話したあと、いまでも、あの手品のタネについて頭をめぐらしているのだと嘘をついた。あの忽然と空中からあらわれた生きている錦鯉だけが、自分と戸倉とをつなぐ道

具であるような気がしたのである。実際は、北京で観た雑技のひとこまひとこまは、彼女の心では、すでに薄らいでいた。かおりにとっては、手品は手品にしかすぎなかった。そのときは我を忘れたが、そこから離れてしまえば、匂いも形もない絵空事で終わってしまう類いの座興だったのである。それが女というものの特質なのか、それとも自分という女の特質なのか、かおりにはわからなかった。ただ手品の鯉にまだ興奮しているふりをしなければ、戸倉に嫌われてしまうような気がしたのだった。

自分と戸倉とが、これ以上の関係になることは有り得ない。それは、おそらく確実に有り得ないだろう。かおりはそう思っていたが、それでも戸倉に嫌われたくなかった。そんな自分の心を思うとき、いつも、戸倉への軽い憎しみを抱いた。

直通の電話が鳴ったので受話器を取ると、兄の声が聞こえた。

「いま、少し時間はあるかい？」

いやに元気そうな声で夏彦は言った。

「四時に人と逢うけど、それまではあいてるわ」

「近くまできてるんだ。かおりに頼み事があるんだよ。バームっていう喫茶店があるだろう？　お前がときどき行ってた蕎麦屋の隣だ。いま、そこにいるんだ。こられるか？」

「頼み事って、なあに？」

「就職するんだよ。それで身元保証人がいるんだ。兄妹でもかまわないらしいから、お

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前に頼もうと思ってさ」
「就職？　どんな仕事なの？」
夏彦は、逢ってから話すと言って電話を切った。夏彦は、かおりが中国に行っているあいだに、三鷹にアパートを借り、そこで暮らすようになっていた。しかし、かおりのマンションにも会社にも連絡をしてこなかったので、またあの高木澄子という歳上の未亡人と外国にでも行っているのかもしれない、とかおりは思っていたのだった。
かおりは、机の上の書類をしまい、業務部員だが、実際はかおりの秘書のような仕事に専念している武藤志乃子に行き先を告げ、事務所を出て、エレヴェーターに乗った。
「お兄さんが就職？」
かおりは、胸の内で言い、兄に対する一縷の望みが完全に絶たれたと思った。兄の辞表は、いまなお、会長が預かるという形で、正式に受理していなかった。ほとんどあきらめてはいても、かおりは、やはりいずれは兄にモス・クラブを引き受けてもらいたいという気持を捨て切れなかったのである。
かおりは、喫茶店の前で、自分の手首に目をやった。夏彦が香港で買ってきてくれたブレスレットをはめていた。兄のみやげなど身につけるものかと意地を張っていたのだが、その凝った細工が気に入って、三日前から使い始めたのだった。
夏彦は、かおりを見るなり、めざとくそのブレスレットに気づき、
「あっ、ちゃんとはめてくれてるんだな」

と言った。かおりは、アイスティーを注文し、
「モス・クラブからは、完全に離れるのね？　お兄さんの辞表、私が預かったままになってるのよ」
と言った。言いながら、かおりは、兄の顔つきやら身につけているものを観察した。少し痩せたような気がしたが、日に灼けて、力仕事をしている人間にありがちな、野放図さと埃っぽさを感じさせた。自慢のティファニーの時計の代わりに、デジタル時計をはめている。
「俺がモス・クラブで、もう一度、一からやり直せるのなら、俺にとってもそれが一番らくだよ。でも、そうはいかない。お前が余計な苦労をしょいこむだけじゃなくて、乾につまらない借りが出来る。俺がモス・クラブに帰るのは、百害あって一利なしだ」
夏彦の口調も表情も淡々としていた。その淡々としたところは、以前の、世間や人間に対して薄い膜をとおして向かい合う際の、一見淡々としているかのように見える視線や素振りとは、あきらかに異質のものであった。
「そう、仕方がないわね。他の会社に就職した人間の辞表を、預かりという形にはしておけないものね」
かおりは、そう言って、一呼吸置き、
「どんな会社に就職するの？」
と訊いた。

「運送会社なんだ」
「運送会社？」
かおりは、どうせ兄のことだから、見かけの派手な仕事につくのだろうとばかり思っていたのである。
「運送会社で何をするの？」
「営業部に保安課ってのがあってね。長距離運転手の勤務スケジュールを作成し、その仕事を管理するんだ。見習いで勤めだして、きのうでちょうど一カ月たったんだ。そしたら、きのう、専務に呼ばれて、正式に社員として働かないかって勧められた」
「一カ月も前から運送会社に勤めてたの？」
ふざけて、からかっているのではあるまいか……。なかばそんな気持ちで、かおりは夏彦の顔を見入った。
「ああ、最初は長距離トラックの助手席に乗せられたりしたよ。東京を夜の九時に出発した大型冷凍車が、安全速度を守って、途中の休憩時間もいれ、予期しない道路の渋滞も考慮にいれて、何時間で但馬半島の香住港に行き、何時間で帰ってこられるかってことを、実際に経験しとかなきゃいけないからね」
「香住港？」
夏彦は微笑し、
「そう、鎧の近くの、香住港さ。得意先は、築地の魚市場とか寿司屋、料理屋、それに

デパートの食料品部」
「大きな会社なの？」
「いや、大型の冷凍車を十二台持ってるだけだから、大きいとは言えないな。でも、堅実にやってるよ。事故は会社をつぶすってのが、社訓の最初に入ってる。高速道路で百キロ以上のスピードを出した運転手は馘になるんだ。俺の仕事は、タコグラフの点検。運転手の福利厚生のための管理。トラックの整備チェック。まあそんなところかな」
夏彦は、ジャケットの内ポケットから茶封筒を出した。中には、身元保証人用の書類が入っていた。
「頼むよ。形式みたいなもんだけど、ある程度の生活力を持ってる人間じゃなきゃいけないんだってさ。だから無職とか、会社の平社員は具合が悪い。とにかくお前は、モス・クラブの会長だからな」
夏彦は、そう言って、かおりに頭を下げた。
夏彦が、自分に頭を下げるなどということは、この数年間のうちの記憶にはなかったので、彼女はかえって薄気味悪く感じ、素直に引き受けるのをためらった。
「どうして運送会社で働く気になったの？」
あの高木澄子という女と別れたのだろうか……。そんなことを心のどこかでちらっと考えながら、かおりは夏彦に訊いた。
「働くことに理由なんてあるか？　俺だって、いつまでもぶらぶらしてられないから

な」
「だって、お金持の女性に養ってもらって、気ままに優雅な暮らしをするっていうのが、お兄さんの不動の人生設計だったんでしょう？」
夏彦は吹き出すように笑い、
「女のヒモとして生きようってのが、俺の不動の人生設計だなんて、それはお前、あんまり俺に対して失礼だよ。よっぽど馬鹿だと思われてた証拠だな」
と言い、かおりから視線をそらすと、しばらく考え込んでいたが、
「頼むよ。出来たら、きょう中にこの書類を届けたいんだ」
と言った。
「高木澄子さんとは、どうなったの？」
とかおりは思い切って訊いてみた。夏彦のつきあっている女性について質問を投げかけたのは、これが初めてだった。
「いまもつづいてるよ」
「高木さんは、お兄さんが運送会社で働いてることを知ってるんでしょう？」
「そりゃあ知ってるさ」
「一緒に遊ぶ時間が少なくなって、ご機嫌斜めなんじゃない？」
その言い方は、言ったとたんにしまったと思うくらい、毒のある意地悪なものだった。
「どっちが？　俺がか？　それとも澄子がか？」

夏彦は薄く笑っただけで、不快な表情は見せなかった。
「女性のほうが」
「いつまでつづくのかなァって感じで様子を窺ってるけど、内心は歓んでるみたいだな」
いったい、兄はどうしたというのだろう……。ますます薄気味悪くなり、かおりは、夏彦を見つめた。女性問題にかぎらず、夏彦は自分のことに少しでも干渉されるのを嫌い、かおりが遠廻しに探りをいれただけでも、語気を荒くさせて怒ったものだった。
かおりはハンドバッグからボールペンを出すと、身元保証書に自分の住所や職業や氏名を書いた。しかし、印鑑は持ってこなかったので、社に電話をかけて武藤志乃子に持ってこさせようと思い、それを夏彦に言った。
「武藤？　武藤志乃子か？」
「ええ、いつのまにか私の秘書みたいになっちゃったの。でも、モス・クラブの社員と顔を合わせるのがいやだったら、私が取りに行ってくるわ」
「武藤を秘書にしたのは、いつからだ？」
夏彦は周りに視線を配ってから、目つきをきつくさせた。
「中国に行く少し前ぐらいからよ。自然にそうなったの。武藤さんは私よりひとつ歳下だし、骨身を惜しまずに動いてくれるし、機転もきくし……。私の秘書にしとくのは勿体ないんだけど」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com